



松浦奈々さん©FUKAYA/auraY2

＜まつうら・なな 桐朋女子高等学校音楽科を経て、桐朋学園大学を首席で卒業。第15回宝塚バガ音楽コンクール弦楽器部門第1位。バイオリンを故・工藤千博、原田幸一郎の両氏に、室内楽を徳永二男、毛利伯郎の両氏に師事。日本センチュリー交響楽団アシスタント・コンサートミストレスを経て、2015年4月より同楽団コンサートマスターに就任。「ベートーヴェン全曲演奏会」が評価され、大阪市より2019年度咲くやこの花賞を受賞。トリトン晴れた海のオーケストラ、ARKフィルハーモニーメンバー＞



コンサートマスターを務める日本センチュリー交響楽団の演奏会でソロを披露する松浦さん©s.yamamoto

バイオリンを始めたのは7歳です。最初は「かっこいい」という単純な憧れだったんですが、弾けば弾くほど、音色と自分の感情がそのままたつながついていく感覚に引かれていきました。うれしい音、かわいいう音、切ない音…。いろんな音色を自分で探していけるのがたまらなく楽しくなりました。

バイオリン 松浦奈々さん（和歌山出身）

感情表現の楽しさ 原点

息づくというのを舞台に立つたびに感じています。相棒は、17世紀製のフランチェスコ・ルジェリ。古い楽器は音の引き出しが多く、自分がかまくな

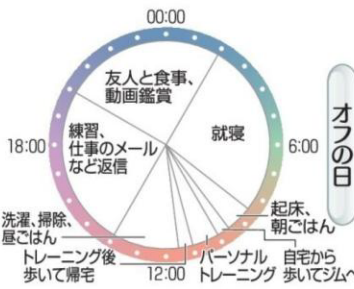
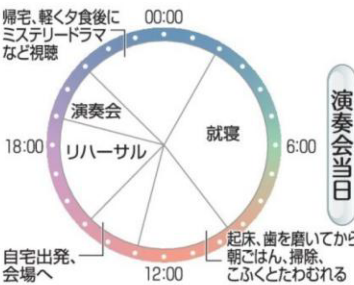
猫の「小福」が癒やしの存在です。ツアーや海外公演も多く、最近では体力維持のためにジムに通っています。体を動かすことで頭がクリアになり、集中力が高まる効果も感じています。

青い海と森の音楽祭では、人と音でつながる幸せを改めて感じた時間でした。アオモリ・フェスティバル・オーケストラ（AFO）では、初めて顔を合わせたメンバーもいました。友と食卓、動画鑑賞、練習、仕事のメールなど返信、洗濯、掃除、朝ごはん、パーソナル トレーニング後、歩いて帰宅、自宅から歩いてジムへ

※次回は1月13日に掲載予定です。（まどめ・加藤桃子）

りんごの音符

17



音楽は面白い

年の瀬に響き渡る「第九」

年の瀬になると、街の空気はどこかせわしくなってくるものです。そんな時に耳を澄ませたいのが、ベートーヴェンの交響曲第九番、いわゆる「第九」です。静かな始まりから重厚な響きが広がる第1楽章、力強いリズムで心を揺さぶる第2

楽章、穏やかで美しい旋律が流れる第3楽章、そして合唱が加わり大きな喜びを歌い上げる第4楽章へと続きます。その流れは、まるで人生の歩みを映すように、闇から光へ、困難から希望へと進んでいきます。

日本では戦後から年末に演奏されることが多く、ラジオやコンサートを通じて「年末の風物詩」として親しまれてきました。第九が伝える「人はみな兄弟」というメッセージは、時代を超えて人々の心に響き続けています。

難しい知識がなくても、音楽の力強さや温かさは自然と胸に届きます。さらに近年では、全国各地で市民合唱団や学生が参加する演奏会も盛んに行われています。その他大規模な舞台から地域の

小さなホールまで、さまざまな場所で第九が響き渡り、人々の絆を深めています。青森県内でも、今年42回目を数える青森市での演奏会が14日に行われる予定で、県内各地で公演が催されています。

音楽を通じて世代や立場を超えて心がつながる瞬間は、まさに第九の精神そのものです。移ろう季節の節目に、第九を聴けば心が整い、来る年を穏やかに迎えられるかもしれません。

（県吹奏楽連盟監修）

2026年秋に第2回「青い海と森の音楽祭」が開かれます